

翻 訳

ジョン・ノックスによる宗教改革文書 (2)

The Reformation Pamphlets by John Knox (2)

— スコットランド貴族と身分制議会に提出された、司教と
カトリック聖職者により宣告された判決に対するアペレイション (1) —

The Appellation from the Sentence Pronounced by the Bishops and
Clergy: Addressed to the Nobility and Estates of Scotland (1)

伊勢田 奈 緒

1. 緒言
2. 翻訳

1. 緒言

ここに翻訳した『アペレイション』¹⁾は、1558年、スコットランドの宗教改革者ジョン・ノックス (John Knox, 1514–1572) が摂政メアリ (Mary of Guise, 1515–1560) に宛てた書簡の増補版に続いて刊行したものであり、彼の抵抗論の確立が論じられている重要な宗教改革文書である。この文書は1556年にヨーロッパ大陸へ亡命中の彼が一時、スコットランドへ帰国し、宗教改革実現のために精力的に活動したことに対するカトリック側の攻撃に対して、反論して書かれたものと見なされる。すなわち、彼がスコットランドにおける宗教改革実現のための一連の運動を終え、スコットランドから去ると、カトリック聖職者たちは彼を異端の廉で召喚命令を出し、欠席裁判で彼を異端と断じ、彼の肖像画を焼いたとされる。彼はジュネーブにおいてこの不正な宣告を知り、2年後の夏、この宣告に対して、スコットランドの貴族と身分制議会宛てにこの『アペレイション』という革命的な抗議文書をジュネーブで印刷し公表したのである。こ

れは1558年7月14日付けの『平民宛ての書簡』と共に一冊に収めていることから『アペレイション』は同年7月前半に完成していたと考えられている。今回の拙訳の箇所ではノックスが不正な宣告に対して異議申し立てすることの正しさを、聖書の中の預言者エレミヤや使徒パウロの言葉を通して、また教父のアンブロシウスやアタナシウスの主張を巧みに用いながら、自説の正当性を明らかにしようと試みている。その上で、貴族層こそ、偶像崇拜に陥っている不敬虔なカトリックの聖職者たちのあり方に抑制することができることを論じている。

(尚、拙訳は一次史料 Laing, David, ed. (1895), *The Works of John Knox*, vol.4 Edinburgh, pp.461-481 の訳であるが、以下を参照した。

*Selected Writings of John Knox, Presbyterian Heritage Publications, 1995, pp.473-489

*Roger A. Mason, ed. (1994), *John Knox, On Rebellion*, pp.72-84)

2. 翻訳

『スコットランドの偽司教たちとカトリック聖職者により受けた残酷で最も不正な宣告に抗してジョン・ノックスの訴えと同王国の貴族、身分制議会並びにコモナルティへの嘆願と勧告』

¹⁾ 正式には『スコットランド貴族と身分制議会に提出された司教とカトリック聖職者により宣告された判決に対するアペレイション』と題されているが、専門家の間では『アペレイション』と略して用いている。

ジュネーヴにて印刷 1558年

ジョン・ノックスは、スコットランド貴族と身分制議会に対して、正しい判断をなさる我らの主イエス・キリストの父なる神から恵みと憐れみと平安を望みます。

この世の生命を愛するだけでなく（貴族たちよ）、私が肉体の死を恐れないのは、今、神により命じられた合法的権力を持つ者として、私に対してなされた不正を貴殿らに説明し、貴殿らが考え直すことを切望するからであります。しかしまた、一部には全ての人が神の永遠の真理に抱いている崇敬からであり、一部には、貴方方が救われるようにと願い、そして公然と神を恐れないような王国内で、ひどい目に遭わされた私の同胞が救われるようにと願う愛、故にであります。

計り知れない憐れみをもつ神が、私の心の目を輝かせ、それだけでなく — 私は、はっきりとわかっているのですが — 沈んだ私の心に触れてくださり、神の恵みによってありのままに私を信じてくださることをうれしく思ってきました。それは、「天の下にはイエスの名のほかに救われるべき名は、人間には与えられていない。」そして、「イエスが、一度、十字架上に献げた犠牲により、約束された王国を受け継ぐ者たちは永遠に聖なる者とされたのである」からであります。そればかりか、私とそして何千もの非常に不幸な者であります。私と同様、《福音主義の》教えの証人であり、聖職者で説教者である者に神が有り余るほどの恵みをもたらし、約束されてこられたことをうれしく思ってきました。具体的に申し上げますと、私は1556年におけるスコットランド王国内で、私は共にあった私の同胞たちとコミュニケーションをとることをおしまなかつたのであります²⁾。なぜなら、私自身、宗教上の責務がある一人であることを承知し、私が責任を負っている賜物を大事にしているからです。そして神は私を必要とされているから、ですから、人々が、恐ろしく思っ

ている申し開きを無駄ではないと思っているからです。私は、ですから、（神の説教者をしたのですが）私が彼らと親交があった間、（神は記録であり、証人でありますが）真に心から、私に赦された賜物に従って、私は救いの御言葉を分かちあい、全ての人々に罪を憎むことを教えてきました。そして、私は神の前で過去も現在もそれ《罪》は、非常に嫌悪すべきもので、神の唯一の御子の死以外に神の義を満足させることができる犠牲はほかにないのであり、また、私たちの天の父の大いなる憐れみを賛美することを教えてきました。さらに、私はこの世に御子を献げ、十字架上の卑しむべき残酷な死で苦しむ以外、神御自身の栄光という本質を惜しむものはないこと、そして、私はこの方法で神の選ばれた子等と神御自身とを和解させることを教えてきました。さらに、彼らのかつての墮落、道徳的腐敗からそのような代償によって浄められた彼ら自身が信じるという義務とは何かを教えてまいりました。すなわち、それは彼らが新しい生き方の中で歩く義務があつて、肉の欲に対して戦い、いつでも神が神の子等に歩くよう準備されたそのような良き働きをなすことによって、神を称えることを学ぶことを説いてきたのです。私は、さらに教義において断言します。すなわち、私の主キリスト・イエスが教えられたように、「私《イエス・キリスト》を否定するものは誰でも、そのうえ、この邪悪な時代の人々の前で、私《イエス・キリスト》を恥じるものは誰でも、わたしも、天の父の前で、その人を知らないと言うだろう。」と。だから、私は永遠の命への希望というものは、すべての迷信やむなしい宗教や偶像崇拝を避けることが必要であると、恐れずに、断言するのです。

私は、神御自身の御言葉の明かな命令に聞かずになされる、神への奉仕や崇敬はみな、むなしい宗教、偶像崇拝と呼びます。私は、神の聖書に一致している教えを信じています。そして、この教えのどの点においても呪うようなそのような厚かましくできた被造物はなかつたと思います。しかし、にもかかわらず、貴方方の偽司教や不敬虔な聖職者

²⁾ ノックスは1555年から1556年まで一時スコットランドに帰国しプロテスタント運動に精力的に活動した。

は私を異端者とし、この教えを異端とし、私を呪い、私に対して、死の宣告を發し、その証明に《私の》肖像画を焼いたのであります³⁾。この誤った残忍な宣告、また邪悪な時代の人々のすべての判断から、私は、貴殿らに合法的に一般教会会議に訴え、また最古の法や法典のようなものに、彼らの明かな不信心が改革されておらずに、それを保持していることの立証をしたいのであります。私が貴殿らを必要とするのは、神が人々の支配者である貴方等に命じられたものとして、非常に必要であるからです。その理由は支配下にある混乱した罪なき人々を守るため、貴殿らの手が必要なのであります。一方、今日の宗教における議論については、合法的に決定され、そこでは貴殿らが、私を受け入れ、そしてこれらの残忍な獣たちによる多くの不正な諸々が、貴殿らの防衛と保護において圧迫され得ると考えるからであります。

閣下らは、ご存知だと思いますが、私だけではなく、ドイツの大部分、スイス、デンマーク王国、ポーランドの貴族階級と、共に改革された他の多くの諸都市や諸教会も、今の時代の有害なローマ・カトリック教徒たちに対して反対しており、彼等は非常に熱心に合法的な教会会議において、反キリストの暴君に対して訴え、そして宗教でのすべての議論が神の非常に神聖な御言葉の權威によって決定されることを要請しています。そして、この点において、言われているように、もし、教会会議がより大きな出来事、祭典や儀式を伴ってなされるようでしたら、閣下らに、同様に、私の単純かつ明快な訴えも、価値があり、効果があり、必要があると再び、訴えたいのです。そして、私は邪悪や不正やあるいは、誤った意見をもたせようとするのではなく、非常に公正で、神の御言葉によって、また古代の法によって、非常に敬虔なる教会会議による決定に告訴しているのであります。そして評判の悪い人々を赦していると私に思わせてい

る暴君らの怒りに抗して、神に任じられた権力者としての貴殿らが、私を守ってくれ、貴殿等の助けを求める私を受け入れてくれることを願うのであります。神の言葉は、次のように命じます。人に罪があり、罪を犯したため、死に値することをその人に見いだされる以外、死ぬ者はいない、つまり、死刑に処せられるには、二人ないしは三人の証言によって明らかに確信される必要があるとしています。古代の法は告訴された者に対して（犯罪が決してひどいものではなくても）、正しく弁護することを赦すのであります。そしてまた、敬虔なる教会会議は、次のように命じます。司教であろうと教会の者であろうと、いかなる罪で非難されようと、判決に参加しないことを、つまり彼らを非難する者のために試みられる教会会議に参加しないことを命ずるのであります。

これらのことを私は、閣下らが認めて下さることを要求します。すなわち、私たちの反対者たちが、異端として非難する教えが、単純明快な神の御言葉によって試みられているのであって、正しい弁護とは、反キリストの有害な今の時代の人々に反する戦いを支持することを私たちに認められることであり、そのことを私は要求します。そしてまた、彼らが私たちのことで、判決からはずされることを要求します。彼らが、私たちを非難しているのは、何か特別な者に反対しているのではなく、王国全体に反対しているから見なしているからです。しかし、私たちは、この王国が、神にそして、神の命令に反対して、神の主なる使徒たちによる神の教会において確立したキリスト・イエスの命令に反対して、奪った権力であることを疑えないのであります。そのうえ、私たちは、ローマ教皇の王国が反キリストの王国であり、権力であることを疑えないのであります。そして、だから、私の主よ、キリスト・イエスの名において、次のことが試みられるようになりますように祈ります。貴殿ら王国の貴族は、その權威によって、罪人である、ローマの反キリスト者の忌まわしい不敬虔を見抜き、そして暴いて、神の栄光を促進し、司教と呼ばれる

³⁾ 1556年、ノックスがジュネーブに到着してまもなくカトリック聖職者らによって召喚命令が出され、彼は欠席のまま死刑の宣告を受け、彼の肖像画が焼かれた。

者たちに、その残酷な殺人をやめることを強い、そればかりでなく、彼らの罪は、彼らが世話をする義務のあるキリストの群れを正しく導かないということに彼らに答えさせることができる信じ、私は貴殿等を必要とするのであります。

しかし、ここに私は疑われるべき2つのことを知っています。まず、私が異端者として非難されているのをみて、私の訴えが、合法的で認められるべきであるかどうか、であります。そして第二に、閣下らが、貴方方の司教たち（彼らは、宗教の事柄において、彼らに属する全ての権力を要求しているのであります）の宣告によって、すでに私が告訴されているのを見て、この件で、貴殿らの支持を求める者を弁護するおつもりがおありかどうか、ということです。この件に関して、私は、どちらもしっかりと証明することができます。第一、私の訴えは、非常に合法的であり、正しいのであって、第二に、閣下たちは貴方方の助けを求めている私を、弁護することを断ることはできないのではなくて、そうしている間に、貴方方は、神に反逆的で、殺人者たちを維持し、罪のない者たちの血を流す者であることを告白していることになるからです。

私が、市民法によって（彼らの法典では、神を呪っているのですが）、私のため、彼らの宣告に対してどのように正しく訴えられるかは、長く話をすることではありません。ただ、私は、全ての人が訴えには正しい理由があるということを告白する、この点について、触れたいのです。まず、私は、この間、彼らの管轄権の中にいず、彼らの暴政に従わない自由都市でキリストの福音を宣べ伝える責任を負っていたのであって、合法的に彼らが、出頭を命じることはできないのであります⁴⁾。第二に、私に対して、彼らの出頭命令がなされる通知はなく、それは彼らの悪意と思われ、秘密に出されたものであって、だから、必要とされる召喚の写しは否定されるものであり

ます。第三に、スコットランド王国に、私は、以前、彼らの不正な暴政により自国を追放され、自由にあるいは確実に入ることもできなかったのです。そして、最後ですが、私に対し、彼らは過去も現在も、正当で公平な裁判ができないため、女王である未亡人宛に刊行された手紙により、私の召喚は、私が反対して異議申し立てする前に、私は彼らを非難したのです⁵⁾。《私はこの申し立てにより》、彼らの全ての罪を証明しようと自分自身を献げるつもりで命をかけたのです。彼らは教会的権威がないばかりか、キリストに信仰告白している国家の黙認にも何も関わらないのです。彼らの召喚命令に先立つこの私への非難は、神の法によってでも、人の法によってでもなく、彼らは私に、正当な判決を私に認められた場所で、公に彼らに反対しようとする私の非難を証明することができず、しかも、彼らは私に答えさせようとするのであります。私は、次のことをはっきりと証明したいのです。すなわち、司教たちばかりでなく、教皇も、彼らに反対する非難を自身で一掃するまで、すべての権威と判決の宣告から、はずれるべきなのです。さらに私は次のことを証明したいのです。私が貴殿ら司教である、すべての野次馬連たちを非難しなければならないことよりも、小さな罪のため、司教や教皇たちは、非常に厳格に、すべての名誉と管理を奪ってきたということです。

しかし、これは私の主なる根拠ではありません。私は今、次のことを示すために喜んで立ち向かいたいのです。神の預言者たちや、キリスト・イエスの説教者たちが、目に見える教会の宣告や判断によって訴えることは、世俗行政官の知る限りでは合法的であります。世俗行政官《の使命》は、神の法によって、彼ら《神の預言者やキリスト・イエスの説教者》のことを聞き、暴政から彼らを守ることになっているのであります。預言者エレミヤ⁶⁾は、神に命じられ、実際、主の宮殿の庭に立って説教をしました。すなわち、《彼の

4) ノックスは1556年7月にはジュネーブに戻っていたことを指している。

5) すなわち、ノックスは摂政メアりに1556年と1558年に手紙を書き、発行した。

説教の内容は》イスラエルは滅ぼされ、地上のすべての国々に恥をさらされ、そして、また神の著名な神殿は、シロのように、荒れ果てました。なぜなら、祭司と預言者たちと民が、神が彼らに示された法によって歩かず、また、神が彼らを立ち返るように送った預言者たちの声に従わなかったからです《というものでした》。この説教のため、エレミヤは逮捕され、彼に反対する祭司たち、預言者たち、民によって死の宣告をされたのです。これらのことは、うわさが広まって、ユダの支配者の耳に達し、彼らは、王の宮殿から、主の神殿まで上って来て、このことをもっと知るために裁きの座に着いたのです。しかし、祭司たちや預言者たちは、残酷な宣告を続け、その宣言の前に、次のように言いました。「この人は、死に値します。というのは、この人は、あなたがたが聞かれたように、この都に敵対する預言をしたからです。」と。しかし、エレミヤは、聖霊に導かれて、彼らの暴虐な宣告の言葉に反対して自分の弁護を始めました。「主が（彼は言うのですが）、私を送って、あなたがたが聞いたすべての言葉をこの神殿とこの都に対して預言させられたのだ。今や、だから、あなたがたは、自分の道を正しくし、あなたがたの神、主の声に聞きなさい。そして、それから、主は、あなたがたに語られた災いを悔いるであろう。私と言えば、見よ、私は、あなたがたの手の中にあり（彼は、支配者たちに語っているのですが）、貴方が良いと思い、正しいと思うことをしなさい。にもかかわらず、あなたがたは、しっかり知っておきなさい。もし、あなたがたが、

私を殺せば、あなた方自身と、この都とその住民の上に無実のものの血を流した罪を犯すことを。確かに、主は、私を送り、これらのすべての言葉をあなた方の耳に告げさせられたのだから。」と。それから、支配者や民は（《聖書の》テキストが言っているのですが）、次のように言います。「この人は、死に当たる罪はない。なぜなら、彼は私たちの神、主の名によって語ったのだから。」と⁷⁾。そして、いくつかの争いの後、この預言者は、危険から救い出されたのでした。

この事実と歴史は、私が断言する前にすべてを明らかに証明しています。すなわち、もし、不当ならば、誰によって宣告されようと、神の僕たちが、死の宣告に反対して、市民行政官の助けを要求することは合法的なことであることを証明しています。そして、市民のための剣は、祭司たちの激怒を抑える力を持っていて、彼らが有罪の宣告をした者を解放する力を持つものなのです。なぜなら、神の預言者は、地上においてだけ見える教会で、知られている人々、すなわち、祭司たちや預言者たちによって、呪われたからです。この祭司たちや預言者たちは、エルサレムにおけるアロンの後継者であり、彼らには神の名によって民に語る責任が与えられていて、彼らの口から民は法の教えを与えられていました。もし、《彼らに対して》何か反逆的なことや不服従があれば、その人は、憐れみをかけられることなく、死ななければならなかったのです。私は言いたいのですが、これらの人々は、（《エレミヤは》神によって權威を与えられているのですが、）エレミヤを先ず、追放しました。というのは、エレミヤが、エルサレムの普通の預言者たちより別の説教をしたからであり、そして、最後に彼らは、エレミヤを捕らえ、（あなたが聞いておられるようにですが、）前述の宣告を彼に対して宣告したのであります。にもかかわらず、その預言者《であるエレミヤ》は、訴えました。すなわち、エレミヤは、彼らに反対して支配者たちに、助けと弁護を非常に熱心に請うたのです。

6) エレミヤは預言者としてエルサレムの陥落（前586年）に伴う南王国ユダの滅亡と、バビロン捕囚というイスラエルの民の悲惨な歴史を経験した。後にエジプトに連れて行かれるが、その地でも預言者活動をしばらく継続した。そして彼はおそらくこのエジプトの地で死んだとされる。預言者エレミヤは当時の同胞に歓迎されなかった。彼はエルサレムの滅亡とバビロン捕囚を預言として語らなければならなかった。そのために彼は偽預言者のようにののしられ、神の代理者としての預言職がいかに重いものであり、困難なものであるかを体験した。それゆえ、旧約聖書における預言者の心理を最もよく提示したのはエレミヤであるとも言える。

7) エレミヤ書26章11～16節参照。

というのは、彼は「私はあなた方の手の中にある。あなたがたが良いと思ひ、正しいと思うことをしなさい。」と言ったのではあります。そして、彼は、自分はどうなるべきか、ということを考えなかったのですが、自分の人生をさげすんで生きたり、怠慢に過ごしたりはしませんでした。しかし、これらの言葉によって、民の支配者や統治者を熱烈に訓戒し、神が彼らを必要としていることを理解させようとしていました。彼は言うべきだったのです。「貴方方ユダの支配者たちや民の統治者たちは、仲間と仲間の間を裁いたり、正当な人間を弁護したり、悪人に有罪宣告をするのに無関心な者に属しています。貴方方は、神御自身によって、聖別され、神の法を語り、公正さをもって、判決するように命じられています。《貴方方が》嘘を言うはずがない《と》思っている》者達によって、私に対して、死の宣告が告げられたのを聞きました。しかし、彼ら《祭司や預言者達》は神に生きることを止め、民に虚栄心に従うことを教えたのです。そして、彼らは神の真の僕の不倶戴天の敵となり、彼らのうち、私一人が、彼らの邪悪そして神からの背教と離反を非難したのです。それが私の命を求めた唯一の理由です。しかし、すべての公正さと法と正義に反した最大のことは、墮落したところから彼らとその民と貴方方を、再び、神の真の礼拝に呼ぶために神に送られた人間の一人である私が、死刑に苦しむことにあります。なぜなら、私の敵は《私に》死の宣告をするのですから。私は、貴方方の面前に立ちます。神は貴方方を支配者にし、貴方方の権力は、彼らの暴政の権力より上であり、そして貴方方の前に私は、訴訟でさらされるのであります。私は貴方方の手の中にあり、貴方方が正しいと思っていることに忍耐し、抵抗はしません。しかし、私は、寛大さと忍耐をもって、正当な理由で貴方方の判決に訴える私を、貴方方が弁護することに怠慢にならないように願います。また、私の血が流されるのを求めている私の敵を、貴方方が励ますことがないように願います。私は、あえて隠さないで申し上げますが、もし、貴方方が私を殺すのでしたら（そ

れは、もし貴方方が私を弁護しないなら、そうなるのですが）、貴方方は、私の血を流す私の敵の罪を犯すだけでなく、貴方方自身とこの都全体の上に私の血を流した罪を招くことになるのです。」

これらの言葉によって、私は言いたいのですが、神の預言者が、目に見える教会の祭司たちや預言者たちによって死刑を宣告され、支配者たちや世俗行政官たちの助けや支持や弁護を求め、もし、彼らが彼らの権威によって、この預言者の敵の猛威から、彼《エレミヤ》を守れなかったとしたら、彼らは明らかに彼らの手が必要だとした彼の血に脅かされることでしょう。また、彼の訴えとそして、なぜ、彼が弁護されるべきなのか、その理由を主張いたします。彼は神から遣わされて、彼らの悪行と神からの離反を非難しました。そして、彼は、神が以前、神の法において言わなかった教えを教えませんでした。また、彼は、彼らが神へ改心することを望み続けて神が示す道を歩くことを求めました。そして、だから、彼《エレミヤ》は、はっきりと支配者たちに、彼らは神の副官であるとして、祭司たちの盲目的な激怒と暴政から、守ることを請い求めました。にもかかわらず、祭司たちは、宗教のすべての事柄において判断する権威を求める主張をしたのです。そして、彼《エレミヤ》は投獄され、その後、ゼデキヤ王の前に連れ出された時、彼は、同様に請い求めたのです。私は言いたいのですが、後に彼は無実を主張し、彼が、王に対して、王の家来たちに対して、民に対して、反対して怒ったのではなく、必死で王を執りなそうとしたことを主張したのです。「しかし、今や、私の主である王よ、聞いて下さい。私はあなたに願います。私の祈りが貴方の前にそそがれますように。私を書記官ヨナタンの家に送り返さないで下さい。そして、私がそこで殺されないようにして下さい。」と。そして、聖書のテキストは証言しています。王が、彼の監禁の場所を変えるように命じ、他方、その預言者《エレミヤ》は、しばしば、民の権力に助けを求めました。そして、初めは支配者達、その後、王が、彼らの職務に気づき、彼《エレミヤ》に対して

発した不当な宣告から彼を解放したのです。

もし、エレミヤがただ、彼になされた邪悪なことについて主張するためにだけに訴えたのではなくて、彼の無実による弁護を求めて訴えたのだと思うのであれば、そう思う人は、貴方方の司祭たちが私に反対して発した、誤った残忍な宣告から、私が訴えるのも《エレミヤのものど》別物ではないと理解することでしょう。しかし、訴えの正当な理由が何か他にあるのではなくて、無実であることで害するのか、あるいは、無実であることが害される疑念をかけられるのが問題であり、それは、判断の無知によるのか、あるいは、正義の名の下に暴政を行っている者たちの悪意や腐敗によるのかなのです。もし、私が泥棒、殺人者、神を冒瀆する者、姦通者、あるいは、神の言葉が罪を犯すために苦しむよう命じるあらゆる犯罪者であったとしたら、私の訴えはむなしく、断られるべきものでしょう。しかし、私は無実であり、そして貴方方の司祭たちは神の永遠の真実を信じる私を非難しますが、教説では、預言者エレミヤはユダの支配者たちや王の助けを求める自由をもっています。ですから、私も同様に残忍な者たちに反対して貴方方の弁護を請い求める自由をもっているのです。このことは聖パウロの事実によりさらに確かめられます。彼は、エルサレムにおいて捕まった後、初めは、ローマ市民がもつ自由のため、拷問を避けることを求めました⁸⁾。その時、総督は彼に質問をして調べました。その後、正しい裁判が期待されない場所での裁判において、彼は、フェリサイ派の一人であったこと、そして、彼の死者の復活の主張で訴えられた、と述べました。最後に彼はフェストゥスの前で、エルサレムの祭司長たちのすべての知識やまた、判決について皇帝に訴えたのです。最後の点で、それはこの私の場合に属していて、私は少し、このことを話したいと思います。

パウロは様々な時、告発された後、使徒言行録で明らかのように、最後に祭司長たちや

主だったユダヤ人たちは《パウロの》裁判のため、総督フェストゥスと共にカイサリアにやって来ました。そしてパウロは彼らのところに出廷しました。彼らは、パウロを重い罪状で告発したのです。にもかかわらず、彼らはそれを証明することが出来ず、他方、彼《パウロ》は、《自分は》律法に対しても、神殿に対しても、皇帝に対しても、何も罪を犯していないことを弁明したのです。しかし、フェストゥスは、ユダヤ人に気に入られようとして、パウロに言いました。「あなたは、エルサレムに上って、そこで、これらの《告発》について、私の前で、裁判を受けたいと思うか？」しかし、パウロは「私は、皇帝の法廷に出頭しているのですから、ここで裁判を受けるのが当然です。私は、あなたがよく知っているように、ユダヤ人に対して悪いことを行っていません。もし、私が何か悪いことを行っているか、あるいは、何か死罪に値する罪を犯しているのであれば、私は決して死を免れようとは思いません。しかし、彼らが私を告発することが正しいことではないとしたら、だれも私を彼らに引き渡すことはできません。私は、皇帝に訴えます。」と言ったのです。

一見したところ、パウロは裁判でフェストゥスそして、全聖職者たちを大いに傷つけ、そして、この開廷に出席した全ての人と有識者たちの公平さよりも、残忍な暴君⁹⁾における公平さの方を大いに期待したように見えます。恐らく、このことをフェストゥスは理解したのでしょうか。そして、次のように言いました。「あなたは、皇帝に上訴したのだから、皇帝のもとへ出頭するように。」と。そして、彼は言いたかったのです。「私は、私が《貴方に》宣告を発する前に、人として真実を理解したくてエルサレムに貴方が行くことを要望しました。そこでは、貴方自身の国の有識者たちから貴方のことを聞くことができ、この裁判が明瞭になると理解したからです。議論は、宗教に関することにあります。貴方は、律法からの背教者として、神殿の侵害者とし

⁸⁾ これは、パウロがローマの市民権をもっていたことを指している。

⁹⁾ これは、ローマ皇帝を指していると考えられる。

て、彼らの父祖の伝統の違反者として、罪を犯したということです。その宗教の件で私は無知であり、だから、その宗教についての問題を知っている者による情報を私は望むのです。そして、貴方は、多くの敬虔なる父祖たちが貴方のことを聞くことを拒み、そして皇帝に訴え、私たち全ての判決よりも、彼を選んだのです。全くむなしく、たぶん、時を遅らせただけでしょ。」と。

こうして、私は言いたいのですが、パウロは、裁判や祭司長たちに害を与えただけでなく、彼のこの件は一部には、神の意志と宗教について多くを知っている人々（すべての人々が推測されるように）の判決を拒むため、一部には、彼がエルサレムの人々のいない、神を知らない、全ての徳の敵である、ずっと離れたローマにいる皇帝に訴えたかったからではないかと思われるのです。しかし、その使徒《パウロ》は、彼の敵の性質と、彼がキリストの名の下に、自由に語り始めた最初の日から、もう既に、彼らが彼に反対するだろうということがわかっていました。そして、彼は彼らを満足させる判決となることに、あえて、訴えることを恐れなかったのであります。彼らは、はっきりとキリスト・イエスと神を祝福する福音の敵であることを告白し、内紛や反逆の陰謀という手段によってさえ、パウロの死を求めたのであります。そして、だから、パウロは、彼らに決してこのことにおける裁判を認めないし、フェストゥスが、必要としたような傍聴人も認めなかったのです。しかし、彼はしっかりとした強力な根拠に基づいていました。すなわち、彼は、ユダヤ人や律法にも罪を犯してはいないのであって、彼は無実であり、ですから、彼の敵の手の中にあっても、彼を裁けないのであります。私は言いたいのですが、彼のこれらの理由に基づく訴えについて考えますと、彼は、フェストゥスの不満を考慮するのでも、無知の大衆の噂を考慮するのでもなく、それら全てを認めた上で、皇帝の判決に大胆に訴えたのです。

これらの2つの例によって、私は閣下たちが、次のことを疑いなく、ご理解なさること

と思います。それは、暴政に虐げられた神の僕たちが、その暴政に反対する救済策を求めることは合法的であって、彼らの《不当な》判決に訴えたり、行政官の助けを懇願したりすることは、合法的であるということです。神は、エレミヤやパウロに賛成しました。神はだれをも、切望されて有罪判決にすることはできない方です。私は同様な例ですが、原始教会のいくつかの歴史を主張したいと思えます。アンブロシウス¹⁰⁾ やアタナシオス¹¹⁾ のように、前者《アンブロシウス》は、ミラノ以外では裁かれませんでした。そこでは、神の教えは、神の教会全てについて聞かれ、受け入れられ、多くの者によって賛同されました。後者《アタナシウス》は、決してこれらの会議に席を譲ることはなく、そこで、神は、神の真理に反対して陰謀を企てた人々が、裁判や会議に参加していることを知っていました。しかし、神の聖書は、私の唯一の根拠であり、重要なこと全てにおける確信であるので、私は、この2つのかつての証言を、私の訴えが理に適っていて、正当であると十分証明できると思ってきました。同様に、閣下たちが、このことを良心をもって、認めるこ

10) アンブロシウス (Ambrosius ; 339頃～397) イタリアの聖職者で教父。ドイツのトリルに生まれ、ローマで法律家となったが、374年にミラノ司教に叙任された。当時、293年のディオクレティアヌス帝の帝国4分統治以来、イタリア道の首都がおかれていたミラノで歴代のローマ皇帝と渡り合った。正統信仰の確立につとめて西方教会4大博士の一人とされ、テオドシウス一声による国教化に影響を与え、アウグスティヌスの異教信仰からキリスト教への回心を導き、後の聖人と列された人物。

11) アタナシウス (Athanasiusu, Magnus ; 295頃～373) 古代キリスト教会の司教・教会博士。アレキサンドリア司教の秘書として325年のニケーア公会議に出席、父なる神、神の子イエス／キリスト、聖霊の本質的同質性を主張する「三位一体説」の立場にたつて、イエスの神性を否定するアリウス派と激しく論戦、「三位一体説」を認めるニケーア信条を決議させた。326年アレキサンドリアの司教に任じられたが、なおも、アリウス説にたつ関係者やローマ皇帝の介入で彼は前後5回、あわせて17年間も流刑など各地に追放の生活を余儀なくされた。彼の死後の381年、コンスタンティノーブル公会議でニケーア信条は正統教義として確認された。

とを拒めないことを十分断言できると確信しています。

もし、私自身と、エレミヤやパウロと比べることは、私が奢っていると、愚かだとかそのように思う人に対して、不変であり尊厳をもつ福音の真理である神は、迫害を受け、苦しみを受けているキリストの一員たちが決して弱くないことを理解させようとなさるでしょう。心の秘密が暴かれ、そして、私が知っていることと共に、彼らが私に認める奢りやあるいは、プライドを幾分か証言することが出来る時、神は私が言及していることを明らかになさることでしょう。しかし、反キリストの僕たち（彼らは、貴方方の間では司祭と呼ばれているのですが）が姦通を行うような有害な同時代の人々が、私に有罪宣告を行いました。しかし、その教えや理由に触れても、私は人と天使を前に永遠の神の永遠の真理を告白し、率直に語ることを決して恐れませし、恥じたり致しません。そして、その場合、私が私自身と最初から真理を論駁してきた、《キリストの》一員たちとを比べないのは疑問であります。というのは、エレミヤが説教で次のように述べているのは、真理であるからです。「祭司たちは私を知らないのではなく（主は言われるのですが）、司祭たちが裏切って、私から脱落し、退いたのである。預言者たちはバアルによって預言し、助けにならないものの後を追った。私の民は生ける水の源である私を捨て、水の入っていない水溜を掘った。」と。それは、イザヤの時代に祭司たちや見張りたちが口の利けない犬になり、見る力がなく、何も知らない、高慢で、強欲な者になったというのは、真実であります。そして、ついに、支配者たちや祭司たちが、キリスト・イエスの殺人者、神の使徒たちの残忍な迫害者であったことが真実であるように、さらに、私を有罪に処した者たち（教皇の聖職者の全野次馬連のことでありますが）は、真の信仰から脱落し、惑わす霊と、悪霊の教えに耳を貸し、天から地上へ落ちた星であり、干上がった泉であり、そして最後にキリスト・イエスの敵、キリストの徳を否定する者、キリストの死と受難を恐ろしく冒

浼する者であることは、真実なのであります。

さらに、目に見える教会は罪をもたないと言われているのです。預言者や使徒たちを、彼らの教えを除いては、正当に告発できたのです。私は常に証明しようと申し出ているのですが、私が証言する以外、《その教会は》私が血を流すことを求め、しかも私を告発することも罪をもたないことになるのです。そして、今、火や剣によって、維持されているその宗教は、光に対する闇、あるいは、神に対する悪魔と同様に、使徒たちによって教えられ、確立された真の宗教とは全く正反対なのです。また、今、教会の名を主張しているものは、キリスト・イエスの選ばれた配偶者ではありません。同様に、キリスト・イエスを十字架につけ、キリストの教えを呪い、キリストの使徒たちを迫害した、ユダヤ人のシナゴグは、神の真の教会ではありません。ですから、私の戦いは、この時代の高慢で残酷な偽善者たちに反対することを求めるものであり、かつてのこれらの非常に優れた文書の戦いが、その時代の偽預言者たちや悪意に満ちた教会に反対したように、《皆さんは》私自身と私と共通の主張を持っている者たちとを比較することが変だと思ふべきではないのです。また、貴殿らは、ユダの支配者たちが、自身をエレミヤに縛られていると思い、にもかかわらず、彼らは目に見える教会によって、エレミヤに反対し彼に死刑の宣告を下したことと同様に、貴殿ら自身が私に責任を負っていて、私に縛られていて、貴殿らの支えを要求していると判断すべきではないのです。

そして、私の訴えは正しいものであって、キリスト・イエスの憐れみの下、私は貴殿らに、《私の訴えを》必要でないものとしたり、空しいものとしてみなすのではなく、これを認めてくださり、そして貴方方が私を保護し、弁護し、私を受け入れてくださることを要求するのであります。私は、決して罪を犯していないのですから、貴殿らによって、私が本国に出入りして良いことを認め、最後まで、王国全体の前で自由且つ、公に、私が、今日、議論中の論点全てについて、告白して良いとしてくださることを信じています。そして、

また、神から受けた権威をもった、貴方方なのに、長い間、ご自身の目も民の目も見えなくされ、また、ご自身の心も、民の心も欺くことを強いられてきたのです。そして、そうなったのは、その《権威の》せいにしてきたのです。しかし、私は、良心をもつ貴方方を許すことよりも、むしろ、貴方方を必要とするのであって、そのことに何か、疑いが残らないように、数語で、私は、私の申し立てを、神の大きな不満がないものとして、そして貴方方が否定できないこととして、証明したのであります。私は、神が貴殿らを、国家の頭に命じられ、貴殿らは正しい目で神の栄光をお支えなさることを求めます。そしてその務めを遂行なさる上で貴殿らの臣民が、神の真の宗教に正しく導かれるように準備することを要望します。そうすることによって、すべての圧制と暴政から《臣民は》守られ、真の教師たちは維持されるのです。そして、キリスト教徒の群れを略奪し、抑圧するようなお腹をすかせた、盲目的でべてんにかける者たちを、神の法が規定しているように、追放し、罰せられるべきなのです。そして、これらのことをそれぞれ実行することは、貴殿らの職務、名声、名誉、貴殿らが受ける恩恵を果たすことであり、全ての人に与えられた神の不変な法や非常に敬虔なる支配者たちの例に貴殿らは、服する義務があるのであります。

私の目的は、非常に骨を折って、貴殿らが心がけなければならないことのすべてが、神の栄光を促進しなければならないことであると証明することではありません。また、私は、貴殿らが、世の人と同様に、同胞を支配するために高い地位につくのではないことを正当に証明しようと、たくさんの理由を主張しようと思っているのでもありません。なぜなら、これらは異教徒たちが告白したような現実に融合された原則なのでありますから。そして、神のみが、貴殿らを神の座において配し、神の副官として任命するのを見て、そして神ご自身のしるしによって、神のみが貴方方を上級行政官にし、貴方方の同胞を支配させ、にもかかわらず、本質については貴殿らを同胞と全ての点で同じと、みなされるのですか

ら。(というのは、貴殿らは、心に抱くことや、生まれや人生や死において普通の人々と違わないのです。しかし、神のみが、言われるように、貴殿らを上位におき、神が求められるこの特権を神の特別な恩寵によって貴殿らに、与えられたのであります。) 貴殿らに、名誉を与えた神に貴殿らが、不信仰であることは、恐ろしく恩知らずなことではありませんか?そして、さらに、貴殿らが、彼らの子等を父と同様支配するように任じられたことに冷淡であるならば、どんなに恐ろしいことでしょうか?(以降は次号に掲載する予定。)

*尚、拙文のカギ括弧《 》は拙著が補足したものである。